〔長秋記〕天承元年四月八日甲戌、御灌佛也、〇略中藏人女房布施三蓋、置碁局、單騎〇碁彈盤、日記、韓櫃上等、公卿以下布施、在小板敷、

〔葉黃記〕寛元四年四月一日庚申、院御所御更衣事、右少辨分配也、〇略中此外、殿上彈碁局以下、任例有沙汰、

〔嬉遊笑覽四雜伎〕南都東大寺正倉院寶物圖の中に、雙六盤のやうにて中高に作り異なる物あり、おもふに是彈碁の盤にて唐物なるべし、彈碁經に、下呼上擊之などいへるも、盤の中高き故にや、

○

〔和漢三才圖會十七嬉戯〕彈碁　指石、俗云波之木、

世說云、彈碁始自魏宮、文帝於此技且好矣、

按、今云彈碁乃擲石之類、而有少異、兒女常弄之、用碁子十有餘撒之、要不攢重、而以手指彈合、取擊當者、復次如之、無遺爲勝、如誤擊隣石者爲負、

〔嬉遊笑覽六兒戯下〕はじきといふは、小ききさごを玩ぶ、もといしはじきは軍器の名なり、〇略中小兒のはじきも石もて去たるにや、正章獨吟千句、あてなるがせよと仰ある放會（イシハシキ）字、誤て二字になれり、といへり、西鶴が二代男に、藻屑の下のさゝれ貝の、浦めづらかに手づから玉拾ふ業して、まゝごとのむかしを、今にはじきといふなど去て遊びぬ、（こは貞享元年の板なり）貝をも其處により有に任せて用ひしなるべし、今江戸にては、きさごはじきといふも、昔よりの名にてあるべし、海近き處は貝類多くあればなり、

怡顏齋介品に、きさご肥前にて猫貝と云、長崎歳時記に、猫貝を小兒玩ぶことを云て、其法のせはじきと云は、貝を握り手の甲にうけ、又手心にうけ握り取、疊の上にちりたる餘り貝は、一々はじき取て勝負を決す、十五握と云は、各々貝十二十を出し合せ、順々目を塞ぎ面をそむけて、數十五

指石